見よ、その方が来られる

ヨハネの黙示録　１：１－８

司祭　ヨハネ 井田　泉

2024 年 11 月 24 日
降臨節前主日

京都聖三一教会にて

今日は降臨節前主日。1 年の教会の暦の最後の主日です。来週からは降臨節、クリスマスに備える期節が始まります。その降臨節前主日の使徒書として、新約聖書の最後の文書、「ヨハネの黙示録」の冒頭が朗読されました。1 年の締めくくりのこの主日に、新約聖書の締めくくりの書物に触れる機会が与えられたことになります。

ヨハネの黙示録は、ローマ帝国によるキリスト教迫害の時代に書かれた一種の秘密文書です。穏やかな時代にじっくり考えて書かれたものではありません。生きるか死ぬか、殺されるか生き延びるか、信じて耐え忍ぶか背教するか。そういう危険が迫る中で、王たるイエス、主権者たるイエス・キリストを示して人々を励まそうとして、この黙示録は書かれたのです。

今日はその一端に触れてみましょう。

「見よ、その方が雲に乗って来られる。」1:7

「その方」というのは救い主イエス・キリストです。迫害にさらされ、ローマ皇帝を拝むように強制されるなかで、自分たちは放置されたままなのか。否、その方、イエス・キリストが再び来てくださる。これだけが最後の希望です。

ところでヨハネの黙示録の著者ヨハネは、幻（ビジョン）を見る人でした。幻というと、現実離れしたたわ言のように聞こ

えるかもしれません。けれども聖書の世界においては、幻はしばしば重要な意味を持っています。人々が現実のあまりの困難に打ちひしがれて希望を失おうとするとき、神は幻を示して希望を与えられる。今の現実はこうだけれども、神がやがて実現される別の現実がある。それをありありと示されて、人に伝えるのが預言者の役割のひとつです。現実だけを見ていればわたしたちはつぶれてしまう。神から希望と力を与えられて、今の困難な現実を生き抜いていく。これが信仰です。

イエスもまたある意味で幻を見る方でした。ある時、イエスはこう言われました。

「あなたがたは、『刈り入れまでまだ四か月もある』と言っているではないか。わたしは言う。目を上げて畑を見るがよい。色づいて刈り入れを待っている。」ヨハネ 4:35

人の目に見える現実は、畑のまだ細く小さな麦です。収穫はまだまだずっと先のことです。ところがイエスには見えるのです。黄金色に色づいて刈り入れを待っている豊かな麦畑が。それがはるかに広がっている。

これはおそらく譬えでしょう。現実はやってもやっても努力しても努力しても効果がないように思える。徒労を重ねているように感じて疲れてしまう。けれどもイエスの目にはそれは徒労ではないのです。実りの時、労苦が報われる喜びの時が来る。

それをはっきりイエスは見ておられて、弟子たちにそう言われた。すると弟子たちの目も開かれて、収穫を待つ黄金色の麦畑がかすかに見え始めるのです。希望と力が湧いてくる。わたしたちにもそれが見えるでしょうか。これが聖書の幻です。

旧約聖書の中にも幻を見た人々がいます。その顕著な一人はダニエルです。今日の旧約聖書は、ダニエルの見た幻でした。ダニエルは、黙示録よりも 300 年ほど前の時代の人なのですが、やはり信仰の迫害の時代を生きた人でした。シリアのアンティオコス4世エピファネスという王が権力を振るっていました。アンティオコスはエルサレムの神殿を汚し、そこにゼウスの像を建てて、それをユダヤ人にも拝むように強要しました。そのような耐えがたい現実の中で、彼は神から幻を示されました。それが今日の旧約聖書です。

「夜の幻をなお見ていると、／見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り／『日の老いたる者』の前に来て、そのもとに進み／権威、威光、王権を受けた。諸国、諸族、諸言語の民は皆、彼に仕え／彼の支配はとこしえに続き／その統治は滅びることがない。」ダニエル書 7:13-14

ダニエルは夜の幻の中に見た。**「見よ、『人の子』のような者が天の雲に乗り……」**

「人の子」のような者、というのはメシア、救い主です。イ

エスがご自分ことをしばしば「人の子」と言われたのも、これに関係があるかもしれません。**「日の老いたる者」**とは神さまのことです。

救い主が天の雲に乗って来て、神の前に進み出た。その方は権威、威光、王権を神から受けて世界を治める。

このダニエル書の幻に触れた黙示録の著者は、これは自分たちのことだ！と感じたのです。300年前のダニエル書のここに描かれた救い主の到来こそ、今、わたしたちに与えられている約束だと悟ったのです。ダニエルの見た救い主の幻を、今、黙示録の著者ヨハネも見ます。

「見よ、その方が雲に乗って来られる。」黙示録1:7

「雲に乗って」は文字通りにとらなくてもいいかもしれません。けれども大事なことは、あのかつて地上を歩まれた救い主イエスが、現実に具体的に確実に、再びわたしたちのところに来てくださる、ということです。この方が良いことと悪いことを見分け、悪の力を滅ぼし、苦しめられてきた人々を必ず救われる。これが世界の未来、またわたしたちの未来です。

その方、再びわたしたちのところに来られる方、イエス・キリストはどのような方なのか。ここでいくつかのことが言われているのですが、今は次の言葉を聞きましょう。

「わたしたちを愛し、御自分の血によって罪から解放してくださった方に、……栄光と力が世々に限りなくありますように、アーメン。」1:5-6

この方イエス・キリストは、わたしたちを愛してくださった方、愛していてくださる方です。

その愛は、イエスがわたしたちを呼ばれる言葉の中にこめられています。イエスはわたしたちのことを何と呼ばれるか。

病気で動けない人がベッドごと運ばれてきたとき、イエスはその人を見て、**「子よ」**と呼びかけられた（マルコ 2:5）。わたしたちのことをイエスは**「子よ」**と呼ばれる。わが子よ、わが息子よ、わが娘よ。イエスによって限りなく愛されている子。それがわたしたちです。

またイエスはわたしたちのことを、**「わたしの兄弟、姉妹」**と呼ばれます（ヘブライ 2:11-12）。わたしたちを傍らに引き寄せ、わたしたちをかばって、「これはわたしの兄弟だ、姉妹だ」と言われる。わたしたちはイエスの弟、妹です。

さらにイエスはわたしたちを**「わたしの友」**（ヨハネ 15:14）と呼ばれます。わたしたちは僕（しもべ）であるのに、イエスの足もとにも及ばない者であるのに、わたしたちをまるで対等の存在のように呼ばれる。それはわたしたちを独立した、主体を持った貴

い存在と見ておられるからです。イエスは、喜びと悲しみと労苦をわたしたちと共にしたい。分かち合いたいのです。

このようにイエスがわたしたちを呼ばれる言葉の中に、イエスの深い愛が込められています。

そしてこの方は**「御自分の血によって罪から解放してくださった」**方です。

この世の悪と混乱と罪によってどろどろになってしまったそのわたしたちを、清めて解放するために、イエスは血を流してくださった。わたしたちを生かすために自らは死を引き受けられた。イエスの愛の血がわたしたちを罪から清めたし、また清めるのです。

「見よ、その方が来られる。」

ヨハネの黙示録の最後はこのように結ばれます。

「『然(しか)り、わたしはすぐに来る。』アーメン、主イエスよ、来てください。」22:20

この聖書の約束の言葉を頼りにして、この現実を生きていきましょう。

祈ります。

神さま、わたしたちは争いと不義と混乱と不安の中で過ごしています。けれども救い主イエスは再び必ず来て、わたしたちを救いこの世界を治めると約束してくださいました。この希望を抱いて、この世の現実の中でしっかりと歩んて行けるようにしてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン